

---

# 弱に交わる

shibito

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

翳に交わる

### 【Nコード】

N0057BA

### 【作者名】

shibito

### 【あらすじ】

大学のサークル旅行の下見のため、親友の男子生徒とともに恩師の実家である雪の中のお屋敷を訪れた、女子大生の安堂夏海。彼女がそこで体験する、淫猥で不可思議な出来事。

## 交わってはいけない部屋

私と輔が、雪深い山奥のお屋敷にたどり着いたのは、初冬の空が暗く翳りつつある、日暮れ時のことだった。

凍りついた雪の中、江戸時代の武家屋敷を思わせるような立派な門の柱に、案外慎ましやかにかけられている、「人間」という名の表札を確認し、私達は中に入った。

門扉から連なる、植え込みに囲まれた小道を、飛び石伝いに歩いて玄関の戸口までゆくと、磨き込まれて黒光りしている上がり框の手前で、三十半ばぐらいの和服の女が、静々と三つ指ついて出迎えた。私は、髪をひつつめ、地味にこしらえている女の姿に眼を凝らした。

「××大学の安堂夏海あたちなつみです。人間先生には、大変お世話になっておりました」

女から眼を逸らさずに、頭をさげた。女は柔らかく微笑むと、

「吉村紫と申します。よしむらゆかり。当家の雑務を任されております。ご用の向きがございましたら、何なりとお申しつけくださいませ」

そう言って、改めて座礼をした。……どうやら、お手伝いさんだったらしい。気品ある物腰にふさわしく、声音は穏やかで言葉遣いも丁寧なだけでなく、イントネーションにこの地方特有の訛りを感じる。きつと土地の人なのだろう。

「同じく、××大学の、天知輔あまちたすくです。今夜一晩、どうぞよろしくお願いたします」

隣に居た輔が、はきはきと好青年ぶった自己紹介をした。

輔は、私と同じ二年生だけど、一浪していたから、年齢は一つ上になる。けれど、童顔な上に子供っぽい性格をしているので、あまり年上って感じはしない。実際、連れ立って歩いていると、私の方がお姉さんに見られるほどのだ。本人も多少は気にしているらしく、こうして初対面の人と話をする時には、少しでも大人びて見

られるよう、マナーには気を配っている様子なのだった。

「この度は、人間先生のご厚意に甘えさせていただき、誠に感謝しております」

輔は、まるで就職試験の面接の練習時のように、しゃっちょこばっつてお辞儀をした。

「いいえ。お寒い中を、さぞお疲れになったことでしょう。まずはおありがとうございます」

吉村紫は、ささっとスリッパを用意し、私達を促した。

大学で、スポーツ系・なんでもありのお遊びサークルに所属している私と輔は、今年の冬の、スキー旅行の幹事を任されていた。幹事の使命はただ一つ。可能な限り安あがりな宿を見つけ、我がサークル年間二大イベントの一つであるスキー旅行を、格安で済ませるべく尽力すること。ちなみに、二大イベントのもう一個は、夏のスキューバ旅行だ。

そんなわけで、毎回幹事の順番が廻ってきた者は、旅行の一ヶ月くらい前から、宿探しに奔走するのが恒例となっていた。学業やバイトの片手間に、結構大変なお仕事なんだけど、私は、去年やったスキューバ旅行の幹事以来、二度目の経験だから、もう慣れたものだった。

それに今回は、宿の当てもすであつた。私の通う研究室の、元・講師、人間圭樹いんまけいじゅがその当てだった。

人間先生は、今年三十歳になつたばかり。長身で、精悍なイメージの男性で、見た目に違わず、アクティブでスポーツも万能ときている。研究室内では目立って格好良かったので、女子の中にも、密かに憧れてるようなのが何人も居た。

実を言うと、私もその内の一人だった。もつとも私の場合、ただ憧れるだけでは済まसानかつたけど。

人間先生と私は、かつて恋人同士だった。

かつて、ということだから、当然今はもう終わっている。終わったのは今年の秋口。半年ちよつとの付き合いだった。

論文に没頭するために、大学を離れて東北にある実家に戻るから。というのが、彼の言い分だった。だけど私は知っていた。人間先生は、実家に奥さんを置いて東京に来ていた。要するに彼は、奥さんのところに戻ったのだ。

それで、人間先生の実家が、東北の山の中にある大きなお屋敷で、なおかつ、スキー場からもそう遠くはないということ、以前小耳に挟んでいた私は、さっそく連絡を入れたのだった。サークルの旅行で、十人ぐらいで泊まれる格安の宿を探してるんだけど、先生のところ頼めない？と。

別れて間もない元カノが、そんな風に連絡してきた場合、難色を示すのが普通の反応だろうと思う。不倫だったら尚のこと。ところが人間先生ときたら、難色を示すどころか、二つ返事でOKしてくれたのだった。

元々、人間先生はそういう人だった。研究者としては切れ者の部類に入ると思うんだけど、どっかこう、抜けてるっていうか、浮世離れしているというか。つまりは変人なのだ。まあ、今の私にとってそれは、都合のいいことではあったけれど。

で、いつでも好きな時に遊びに来たらいい、という人間先生のお言葉に甘え、大学の悪友にして弟分の輔を誘い、サークル旅行に先立って、週末のみの下見旅行と洒落込んだわけだった。男連れで来たのは、その方が先生も安心できるだろうという、私なりの配慮だ。私と輔は、吉村紫に案内されて、長い廊下を渡って行った。

「さあ、どうぞ。こちらの部屋をお使ください」

いくつかの角を曲がった後、吉村紫に通されたのは、十畳ばかりの和室だった。入って真向かいの一面が白い障子。左側は床の間で、右は襖で閉ざされている。部屋の中央にはちゃぶ台と座椅子が用意されていて、ちょっとした旅館の一室みたいなこしらえになっていた。

「おー、暖けえ」

輔は、部屋の片隅に置かれたファンヒーターを目ざとく見つける

と、ちょこちょここと駆け寄って手の平をかざした。私は部屋を横切り、障子を開けた。障子の向こうは、僅かな板の間を挟んで、ガラスのサッシになっていた。外は、雪化粧を施された庭園だ。すでに日は落ちていて、暗く沈んだ風景の中で、雪明りだけがぼっかりと明るく見えた。

「こちらの襖を開けると、お部屋が広く使えます」

吉村紫の声に振り返る。見ると、部屋の襖はすでに開け放されていて、襖向こうの部屋が見通せた。向こうも、こっこの部屋と変わらない広さがあった。

「ははあ、これなら、寝る時に男女で部屋を分けることもできるし、便利で良さそうだなあ。ありがとうございます、吉村さん」

輔は、屈託のない口調で吉村紫に礼を言った。吉村紫は、控えめな微笑を浮かべてかぶりを振った。

「全て、圭樹様のお計らいですから。わたくしは何も……」

「そういえば、人間先生や奥様は、どちらにいらっしゃるのでしょうか？」

ふと思いついて私は訊いた。私と輔が今日ここに来ことは、すでに伝えてあつたはずだ。なのに、人間先生はまだ姿を見せない。彼の奥さんもだ。

私の問いに、吉村紫は、困ったように俯いた。

「申し訳ございません。実は、圭樹様は今、麓の街にある大学に行っておりまして」

「大学、ですか」

「ええ。東京の大学を辞めてから、圭樹様は地元の大学で、非常勤の講師をなさっておいでなのです。それで、今日も……もちろん、お二方が今日いらっしゃることはご承知のほうですから、今夜中には戻られるかと。それで、奥様の方ですが」

吉村紫は、私が開けた障子の方に眼をやりながら続けた。

「奥様はその、今日は体調が優れず、臥せておりました」

「えっ？ 先生の奥さん、ご病気なんですか？」

横から口を出した輔に向かい、吉村紫は、曖昧に頷いて見せた。  
「元々、あまりお躰の丈夫な方ではないものですから。もうずっと、入院したり退院したりを繰り返しておいでなのです。そんなわけですので、ご挨拶も叶わぬようでした、申し訳ございません」  
「とんでもない。こちらこそ、そんな大変な時に押しかけてしまつて」

畳に手を突いて頭をさげようとする吉村紫を、輔が、恐縮した素振りで見しとどめた。

「どうか、僕らのことはお構いなく。お邪魔にならないよう、適当にやっていますから」

そんなことを言いながら、輔は吉村紫の手の甲に、さりげなく触れた。吉村紫は、ちょっとだけ肩を震わせたが、感情を面には出さず、慎ましやかに手を引つ込めた。

それから私達は、すぐさまお風呂に案内された。大邸宅だけあって、広々としたお風呂だったけど、さすがに、旅館よろしく男湯と女湯があるわけではないから、私達は順番に入浴することにした。じゃんけんの結果、輔が先に入ることが決まり、私は部屋で待つことになった。

部屋に戻るべく、廊下を歩いている途中、吉村紫は、遠慮がちに口を開いた。

「あのう……安堂さんは、天知さんとは、随分親しくいらっしやるのでしょうか？」

「へっ？」

私は、素っ頓狂な声を出してしまった。つまり、私と輔が付き合い合っているのか、と訊いているのだらうけど、けど、なんでこの人、そんなことを知りたがっているのだらう？

「ああ、申し訳ございません、立ち入ったことを伺ってしまつて……ですが、その……」

吉村紫は足を止め、意を決したように私を見た。

「お願いがございます。今宵……お休みになる際には、襖を隔てた

別々の部屋になさって欲しいのです。つまりその、天知さんと、同衾はなさらないでいただきたいと」

私はまじまじと、吉村紫の奥二重の眼を見返した。

「それって、今夜輔とはセックスするなっことでですか？」

私はずばり言い返すと、吉村紫は、年甲斐もなく頬を赤らめ俯いてしまった。なんだか、悪いことをした気になってしまふ。

私と輔は、大学入学以来の腐れ縁だけど、お互いを異性として意識し合ったことなんざ、今まで一度だってなかった。だから、たとえ同じ布団で寝たところで、セックスしちゃう可能性は限りなくゼロだと思う。でも、それをはつきり言ってしまうのは、ちよつとためらわれた。だって、今回私が輔をここに連れて来た理由は、人間先生に対し、私がもう以前のことなんて気にしていない、もう別の男が居るんだって、そう匂わせるのが目的だったから。輔との間に何も無いってばれちゃったら、元も子もないのだ。だから、私は言った。

「私達、宿をお借りする立場ですから、お言いつけには従います。

先生のお宅でふしだらなことをするのも、気が引けますしね」

私の返事を聞いて、吉村紫は、心底ほっとしたようだった。

「ありがとうございます。どうかご理解くださいませね。あそこの部屋でそういった行いに及ばれますと、その、少々困ったことになりますので」

「あそこの部屋が、駄目なんですか？」

思わず私は聞きとがめた。このお屋敷でセックスするな、ではなく、あそこの部屋でするのが駄目とは。いったいどういうことなのだろう。

返事を待つ私の前で、吉村紫は、「しまった」とでも言うように口元を手で覆った。あまり突っ込まれたくないことだったのか。私は、さらに問い質そうとしたが、

「それでは、わたくしはこれで。お風呂が済みましたら、内線でご連絡ください。お夕飯の仕度をいたしますので」



そう言っで、逃げるような小走りで去って行ってしまった。  
廊下に独り残された私は、ぼかんと口を開けて、お太鼓結びの背  
中が遠ざかるのを見送るばかりだった。

## 黒衣着物の女の子

「エッチ厳禁の部屋か。何なんだろうな、いったい」

私の斜向かいにごろんと横になった輔は、満腹しきった気だるさを、声に滲ませそう言った。

二人ともにお風呂を済ませ、吉村紫が部屋に用意してくれた夕飯をあらかた平らげた後、私は輔に、例のことを話して聞かせていた。輔は、天井を見あげて暫しぼんやりしていたけれど、ふいに、何かを思いついた顔で、ぱつと寝返りを打ってこちらを向いた。

「ひよつとしたらさ、この部屋って出るんじゃない？ 俺、ネットの怪談サイトで見たことあるんだ。ある旅館の離れで、カップルが姦チャつてると、押入れの中から、眼を潰された女の幽霊が這い出て来て

……」

「この部屋、押入れないじゃん。そもそもここは、旅館じゃないし」  
私は、素っ気なく言い返した。

「何だよう。せつかく人が盛りあげようとしてるのに」

輔は、タコのように唇を尖がらせてぶーたれる。けれど、すぐに気を取り直して起きあがると、私の真横に座って、肩を抱き寄せた。

「じゃあさ、とりあえず、試してみねえ？ ここで姦チャったら、何が起こるのかをさ」

にやにやと笑いながら、私の脇の下に素早く手を入れ、セーターの上からおっぱい揉んできやがった。私はため息一つつくと、輔のちっちゃい鼻を、ぎゅうつとつまんでやった。

「ひ、ひてててて。はにひやがんだお、はなへ、はなへ！」

「日本語喋れっつーの、この小童め」

私は、つまんだ鼻ごと輔を突き飛ばし、胸の上で腕組みをした。

輔は無様にひっくり返り、赤くなつた鼻をさすりながら、涙を浮かべた恨みがましい眼で私を睨んだ。

「へっ、冗談に決まってるんだろ。誰がお前みたいなの、凶暴でガキ臭い女なんか……こつちから願いさげだつっの」

輔みたいなのに、飲み屋に行くと、高確率で年齢証明を求められるようなクソガキに、ガキ呼ばわりされるのは心外だったけど、でも、彼の性癖を鑑みれば、それもやむないことだった。

なぜって、輔は根っからの熟女マニアだったから。高校時代、バイト先で出会った、四十過ぎのパートのおばちゃんに童貞を奪われたのだそうで、それがトラウマになったのかなんのか、とにかくそれ以来、年増一本槍なのだそう。下は二十八歳以上、上は、場合によっては、六十ぐらいでも全然いけると豪語する彼から見れば、二十歳そこそこの私なんざ、青臭くて話にもならないってところだろう。まあ、そんな彼だからこそ、私も、男女を意識しない、純然たる友人として、付き合っていられるわけだけでも。

輔の嗜好からしたら、私よりむしろ、あの吉村紫なんかがストライクなわけで、実際、さつきちよっと粉かけたりもしていたし、あれはどうなの、と水を向けると案の定、まんざらでもなさそうな感じなのだった。

「着物の女って、やっぱりそられるもんがあるよなあ。うなじとか、袖口から覗く白い腕とかさ。姦れるもんなら姦りたいね」

「そんなこと言っちゃって。あんた、着物の脱がせ方なんて、知ってるの？」

「日舞のお師匠さんと付き合ってた時に教わったけど、忘れてるかなあ。帯さえ解ければ、だいたい何とかかなると思うんだけど」

なんて、けしからん会話を楽しんでいたら、当の吉村紫が、食器をさげにやって来たので、私達は口を閉ざした。

「ああ、そうそう、安堂さんのお荷物が届いているのですが、こちらにお運びしてよろしゅうございますか？」

吉村紫は、ふと思いついたようにそう言った。お願いしますと答えると、彼女はすぐに、宅配便の札のついた、スキーバッグを抱えて戻って来た。

「何お前、スキー板なんか送って来てたの？ まさか、これからナイタースキーにでも出かけようってのか？」

呆れ顔で輔は言った。私は、ひらひらと手を翳して否定した。

「まさか。もうお風呂も済ませちゃったし、だいいち今日はバスで来たんだから、足がもうないじゃない。明日の朝からよ。せつかくここまで来たんだから、ゲレンデの調子も見ときたいじゃないの」「つつたつてお前、昼には列車に乗って東京帰るんだぞ？ ゲレンデに居られるのなんて、せいぜい二時間足らずってところじゃないか？ それだけのためにわざわざ」

お前も好きだなあ、と肩をすくめる輔を尻目に、私は大きめのスキーバッグを、隣の部屋に運んだ。

「明日早くお出かけになるんでしたら、今日はもうお休みになりませんか？」

吉村紫はそう言ったけど、腕時計に眼をやれば、まだ七時を廻ったばかりだった。宵の口もいいところ。到底眠れるもんじゃないだろう。それとも、こんな田舎の山の中ともなると、日暮れと同時に寝てしまうなんて、そう珍しいことでもないのだろうか？

「そうですね、さすがにまだ……それに、人間先生にもご挨拶しておきたいですから。あのう、何時ごろお戻りになるでしょう？」

遠慮がちにそう尋ねると、吉村紫は、少し首を傾げ、考える素振りを見せてから答えた。

「そうですね。特に何もなければ、九時ぐらいには……けれど、お仕事が差し迫っている場合、夜中の一時二時になることも、珍しくはございません。なんでしたら、電話で確認いたしましょうか？」

どうしようかと、私も少し考えた。吉村紫に訊いて貰わずとも、自分でケータイにメールを入れるって手もある。けど、どちらにしてもあまり得策ではない気がしたので、私は首を横に振った。

「いいえ。何だか早く帰れって催促するみたいで、申し訳ないですから。十時ぐらいまで待って、お戻りにならないようなら、お先に休ませて貰うことにします」

「かしこまりました。それでは、お布団の用意だけ、先にさせていただきますね。その間、お二人は、書庫でもご覧になっていらしてはいかがでしょう？ 圭樹様の集められた、珍しい本がたくさんございますから、学生の方には興味深いのではないかと。場所は……」

そう言つて、吉村紫は、書庫とやらへの道筋を、丁寧に教えてくれた。私と輔は、顔を見合わせた。

「面白そうですね、でも、僕らみたいのがお屋敷の中を勝手に歩き廻ったら、ご迷惑ではないですか？」

そう尋ねたのは輔だった。吉村紫は、鷹揚な笑みを浮かべた。

「このお屋敷は、本家から圭樹様お一人のために宛がわれたものでして。住まっているのも、圭樹様の他は、わたくしと、あとは奥様しかいらっしやいません。ご自由になさっても、差し支えはございませんのよ」

私と輔は、再び顔を見合わせた。この広大なお屋敷に、人間先生を含めた三人だけしか住んでいないという事実も驚きだったけど、吉村紫のこの感覚にも、少々面食らった。ざつくばらんといおうか、これもまた、田舎の人特有のものなのか？

はたまたこれは、このお屋敷内での吉村紫の立場が、私が思っていたよりも、ずっと大きいものであることの、証なのかもしれない。お屋敷のことを全て取り仕切っている様子だし、下手をすると、主人である人間先生よりも、実質的な立場は上なのかも。人間先生はかなりのんきなお人だし、ありえないことではない気がした。

だとすると、この吉村紫こそが、人間先生の実質的な妻だという可能性も出てくるわけだ。

私は、吉村紫の白い顔をじっと見つめた。化粧も控えめな、俯き加減のその顔からは、何の感情も読み取ることができなかった。

浮かびあがった疑念を、いったん胸の底に沈め、私は輔とともに、教えられた書庫に向かった。こんな山奥に来てまで勉強したいわけではなかったが、差し当たって他にすることがないからだ。

それに、正直なところを言えば、こうして屋敷内をうろついている

れば、人間先生の奥さんと会える可能性も出てくるとも思った。人間先生と婚姻関係にある女。やはり、一度は会っておきたい。

「ああ、言い忘れておりましたけど」

廊下を歩き始めたところで、吉村紫が、後ろから呼びかけてきた。「申し訳ございません。屋敷内はご自由にご覧になつて構いませんが、二階と、離れに続く渡り廊下の方には、近づかないようお願いいたします。二階では奥様がお休みなのと、あと、渡り廊下の方は、老朽化していて危険なものですから」

……なんか、さつそく釘を刺されてしまった感じだ。微妙な気持ちになつたけど、そんな感情はおくびにも出さず、私はにっこり笑つて見せた。

「わかりました。気をつけますね」

私の返事を聞くと、吉村紫は、安心顔で廊下を戻つて行つた。

「輔、どうしたのよ？」

輔の奴が、吉村紫の後姿を見つめたまま、動かないので呼びかけた。輔は、きよとんとした顔で私を見返したけど、その顔が、だらしない笑顔に崩れた。

「夏海、書庫にはお前一人で行け」

そう言つて、輔は廊下の先を見た。吉村紫のお太鼓の帯が、ちょうど突き当たりの角を曲がつて消えてゆくところだった。

「ねえ、あんたまさか」

私に皆まで言わず、輔は走り出していた。曲がり角の向こうから、声が響いた。

「紫さん、僕も布団を運ぶの手伝います」

私は呆れて肩をすくめた。どうやら輔の奴、本気である年増を口説くつもりらしい。

「ふんだ。勝手にしろつづの」

独りごちて、長い廊下を独り歩き始めた。あの手の、お上品ぶつた和服美人なんてえのは、案外好き者だったりもしそうだけれど、それでも、輔みたいなガキ臭い男の手に負えるものだから、見ものだ

と思った。私はジーンズのポケットからケータイを取り出すと、輔宛に簡単なメールを打つといた。

『どんな首尾だか、後で報告しなさいよ^^』

吉村紫に教えられた書庫は、廊下の一番外れにあるはずだった。

真つ直ぐ行つて、突き当りを右に曲がる。曲がったとたん、急に空気が冷たくなつた。こう広いと、暖房もすみずみまでは行き渡らないのだろう。心なしか、照明までも薄暗い廊下を少し歩いた先に、ようやく書庫の入り口らしき扉が見えた。妙に仰々しい、鉄の飾り模様がついた、木の扉だ。

扉の先、廊下の突き当たりは、裏口になっているようだった。重たそうな板戸が少しだけ開いていて、そこから冷たい空気が入ってくる。とっさに手をかけ閉めようとしたが、もしかすると、換気のためにわざと開けているのかもと思ひ直し、そのままにしておいた。そして、私は書庫に入った。

書庫は、床も壁も板張りの殺風景な部屋だった。でかい本棚が三つ、壁に沿って置いてあり、いずれもカビ臭い本で溢れ返っている。ちよつとした図書館が開けそうな蔵書の数にも驚いたけど、私を最も驚かせたのは、本なんかじゃなかった。部屋の真ん中に突っ立っている、黒髪に黒い着物の女の子の存在だった。

「あ……え？」

言葉を失い、部屋の入り口に立ち尽くした私を、女の子は、三白眼の鋭い瞳で見据えた。年の頃は、十五歳前後といったところか。長く伸ばした重たげな黒髪は、前髪を眉の上でぱつんと切り揃えており、まるで市松人形のようなだ。黒髪と黒い着物に包まれた小さな顔は、陶器のようなつるんとした白さで、一瞬、宙に浮かぶ生首のように見えて不気味だった。もっと普通の格好をすれば、そこそこに可愛い子だと思うんだけど……。

「誰？」

女の子の、小さくかすれた声が問う。それはこっちの台詞だと思つたけれど、とりあえずは答えることにした。

「私は安堂夏海。東京の大学で、人間先生に教わっていたの」

「人間先生？ 圭樹のこと？」

小首を傾げて、女の子は言った。私は頷いた。人間先生を？ 圭樹？ なんて呼ぶところから察するに、親戚の子か何かなのだろうか？

「ねえ、あなたは」

今度は私の番だろうと、問いかけようとした私の口元に、細い指先が伸ばされた。女の子の手が、私の口をしつかりと塞いでいた。

「静かに」

さくらんぼのような唇が言った。

「私、ここに居るのがばれるとまずいの」

女の子は、見かけによらぬ強い力で私の手首を掴むと、廊下を伺いつつ書庫を出て、例の、裏口の板戸を引き開けた。板戸の外には、簡素な歩廊が続いていた。柱と屋根のみに守られた、剥き出しの廊下は雪の庭を横切り、向こう側にある、小さな黒い建物へと繋がっているようだった。

ひよっとしたらこれ、吉村紫が行くなと言ったた渡り廊下なんじゃないの？ そう思い至った時にはすでに遅く、私は女の子に連れられるまま、廊下を渡りきって、離れの中へと引つ張り込まれてしまった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0057ba/>

---

翳に交わる

2011年12月31日01時46分発行